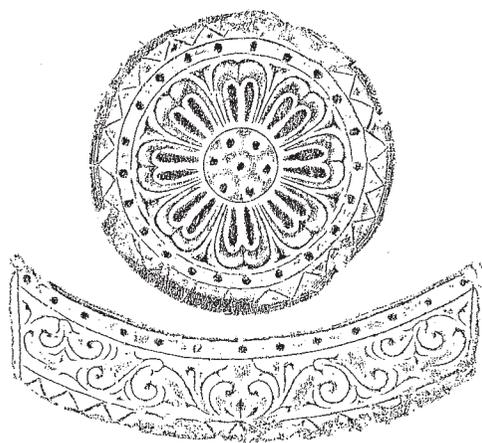


# 特別史跡 讃岐国分寺跡

昭和59年度発掘調査概報



国分寺町教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、香川県綾歌郡国分寺町国分に所在する特別史跡讃岐国分寺跡の昭和59年度保存整備事業にともなう発掘調査の概要である。
- 2 本事業は、国庫補助にともなう発掘調査として、特別史跡讃岐国分寺跡調査整備委員会・香川県教育委員会の指導を受け、香川県綾歌郡国分寺町教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査および本書の作成・編集は、文化庁・調査整備委員会・香川県教育委員会および奈良国立文化財研究所の指導を受け、国分寺町教育委員会主事松尾忠幸が担当した。
- 4 本書の作成に際し、以下の方々のお世話になった。  
奈良国立文化財研究所 町田章・上原真人  
香川県教育委員会 松本豊胤・渡辺明夫  
同 大山真充・坂出調査事務所
- 5 出土した遺物については、国分寺町教育委員会が保管している。

## 序

国分寺町の町名は、遠く天平の時代に聖武天皇の詔勅によって諸国に開基された“国分寺”に由来するものであります。

讃岐国分寺は昭和27年、国の特別史跡として指定を受け、さらにこれより東2kmに昭和3年国の史跡として指定された国分尼寺跡があり、僧寺と尼寺がそろって指定を受けているのも全国的に希少な存在といえるでしょう。特に国分寺跡においては、昨今、土地開発が目ざましく、周囲の開発が進むなかで、昭和57年度に、地権者、文化庁、香川県教育委員会の絶大なるご協力、ご援助をいただき、寺域5万㎡余りのうち北側を中心に2万2千㎡余りを公有化し、開発の手から守るとともに、58年度、59年度と調査を進めてまいりました。特に59年度は、奈良国立文化財研究所の坪井所長様をはじめ、学識経験者の方々からなる讃岐国分寺跡調査整備委員会を設置し、委員の先生方のご指導をいただきながら調査を進め、現本堂（旧講堂跡）東側より、東西2間、南北3間の礎石建物跡が検出されるなど大きな成果が得られました。

昭和60年度以後はさらに充実した体制のもと確認調査を実施し歴史的解明をはかるとともに、国分寺町の将来計画の中心にすえ、史跡の町、歴史と文化の町としてふさわしい史跡公園としての総合的整備計画を策定し、昭和63年春の瀬戸大橋完成とあわせ、地域住民の生活に融合する場となるよう整備に力を傾注してまいりたいと存じます。

また、確認調査より得た数々の資料は、国分寺町に遺された貴重な文化遺産として後世に伝承するため、総意をこめ保存管理に万全を期す所存であります。

この事業はまだ緒についたばかりであり、関係各位のますますのご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

昭和60年3月30日

特別史跡讃岐国分寺跡  
調査・整備委員会委員長

国分寺町長 津 村 文 男

## 目 次

第1章	調査に至る経過	1
第2章	遺跡の立地と環境	2
第3章	調査方法	3
	(1)地区割	3
	(2)調査経過	3
	(3)調査組織	3
第4章	遺構	5
	(1)推定東大門地区	5
	(2)講堂跡東方地区	5
第5章	遺物	8
	(1)瓦	8
	(2)土器	15
第6章	まとめ	16

## 図版目次

PL. 1	(1)東限大溝 (北から)	PL. 5	(9)S B 1 1 (北から)
	(2)東限大溝 (南から)		(10)講堂跡東方調査区全景 (東から)
2	(3)東限大溝 (西から)	6	軒丸瓦
	(4)東限大溝の堆積状況	7	軒丸瓦
3	(5)S B 0 2 (北から)	8	軒丸瓦・軒平瓦
	(6)S B 0 2 (東から)	9	軒平瓦
4	(7)S B 0 2 (北から)	10	軒平瓦・鬼瓦
	(8)S B 0 2 (南から)		

## 挿図目次

第1図	讃岐国分寺跡地区割図	2
2	推定東大門地区遺構図	4
3	東限大溝SD01断面図	5
4	講堂跡東方地区遺構図	6
5	礎石建物SB02付近土層図	7
6	軒丸瓦実測図 1	10
7	軒丸瓦実測図 2	11
8	軒平瓦実測図 1	12
9	軒平瓦実測図 2	13
10	鬼瓦拓影	14
11	土器実測図	15
12	発掘調査位置図	巻末折込

## 第1章 調査に至る経過

昭和51年11月、特別史跡讃岐国分寺跡北辺中央部において、現状変更申請が提出されたことを契機として、国分寺町教育委員会は、文化庁・香川県教育委員会の指導のもとに、史跡地の公有化にとりくみ、昭和57年度までに、指定地約5万㎡のうち22453.67㎡を公有化した。これにひきつづいて、昭和62年度を目標とした史跡地の整備・公園化を推進し、昭和58年度には、史跡整備に先だつ第1年次の発掘調査に着手した。昭和58年度の発掘調査は、寺域北限・東限の確認を主な目的として行ない、東端築地・北端築地・東限大溝を検出した。特に、東端築地跡は指定寺域東限より15m西で検出し、寺域の移動があったことが判明した。東端築地、東限大溝の方位は北で西に約2度振れており、金堂跡の方位とほぼ一致した。

昭和59年度には、新たに整備委員会を発足させ、その指導のもとに発掘調査・整備計画を推進することになった。特別史跡讃岐国分寺跡調査・整備委員会の構成は以下のとおりである。

### 特別史跡讃岐国分寺跡調査・整備委員会

国分寺町長	津村文男	学職経験者	古代史	国島浩一
国分寺町議会代表	中西芳一	〃	考古学	丹羽佑一
国分寺町文化財保護委員会代表	片山 要	〃	造 園	吉田重幸
宝林寺住職	童銅曠純	〃	町 内	水谷 宏
地元代表	中山甲平	奈良国立文化財研究所所長		坪井清足

昭和59年度は、東大門の位置と規模、東端築地跡の南延長線、講堂跡東方における建物跡有無などの確認を目的として、推定東大門地区・講堂跡東方地区の2か所において発掘調査を実施した。



礎石建物SB02発掘調査風景

## 第2章 遺跡の立地と環境

特別史跡讃岐国分寺跡は、香川県綾歌郡国分寺町国分字上所に所在する。遺跡は坂出市との分水嶺をなす蓮光寺山の南東麓にあり、北には国分台丘陵、東には端岡丘陵がのびて、三方を丘陵で囲まれた扇状地先端部に立地する。寺域の南端では標高31.6m、北端では36mで、全体的に北から南に向けてゆるやかに下降する。国分寺跡の東方では、国分台丘陵から水を集めた野間川が南東に向けて流れ、本津川に合流して北東へ流れ高松市内を経て海に注ぐ。国分寺跡の東方約2km、端岡丘陵をへだてた国分寺町新居には国分尼寺跡があり、西南方約1kmの坂出市府中には国分僧・尼寺の瓦を焼いた山内瓦窯跡があつて、ともに国指定史跡となっている。

現在、特別史跡讃岐国分寺跡の指定寺域は、東西227m、南北233mで、史跡中心部分は、現在もお四国八十八ヶ所第八十番札所である白牛山国分寺として、参詣者の列が絶えない。境内には、金堂跡・塔跡の礎石が原位置で残っており、史跡地南端は民家が密集しているが、西・北・東方地区は水田で家屋はなく、良好な環境が保たれている。



第1図 讃岐国分寺跡地区割図（1：2500）

## 第3章 調査方法

### 1 地区割（第1図）

昭和58年度の発掘調査で確認した寺域北東隅の国土座標第IV系X=144330, Y=41330を基準点として、特別史跡讚岐国分寺の推定寺域全体を、国土座標軸に従って60m方眼で区分する（中地区）。中地区名は、東から西、北から南に向けて順次アルファベットで表示する。すなわち、北東隅から西へA・B・C・D・E、東に戻ってF・G・…となり、全体で25区画となる。さらに、中地区を3m方眼に区分し（小地区）、縦軸をアルファベット、横軸を00～19の2ケタ数字で表示して、中地区名と小地区表示とを合成した調査北東隅の記号を小地区名とする。推定東大門地区の中地区名はK地区で、東限大溝の範囲は小地区名では、KB13・14からKL13・14地区となり、講堂跡東方地区はH地区で、礎石建物SB02の中心はHD08地区となる。

### 2 調査組織

調査は、調査整備委員会・香川県教育委員会の指導を受け、国分寺町教育委員会が主体となって実施した。調査参加者は以下のとおりである。

国分寺町教育長            岡内節嘉            同教育委員会社教主事    鎌田良博  
同教育委員会次長補佐   佐々木英典    同教育委員会主事        松尾忠幸  
調査作業員    亀井真由美・橘川綾子・栄礼子・白井サダ子・高岡トヨ子・谷本悦子・千田ツイ子・細谷フサエ・宮崎清子・山川豊子・山本政子   外調査補助員6名

### 3 調査経過

10月    調査の諸手続き準備のうえ、2日より推定東大門地区の調査に着手。耕作土は機械を使って排除する。地山面で東限大溝の西肩を検出。

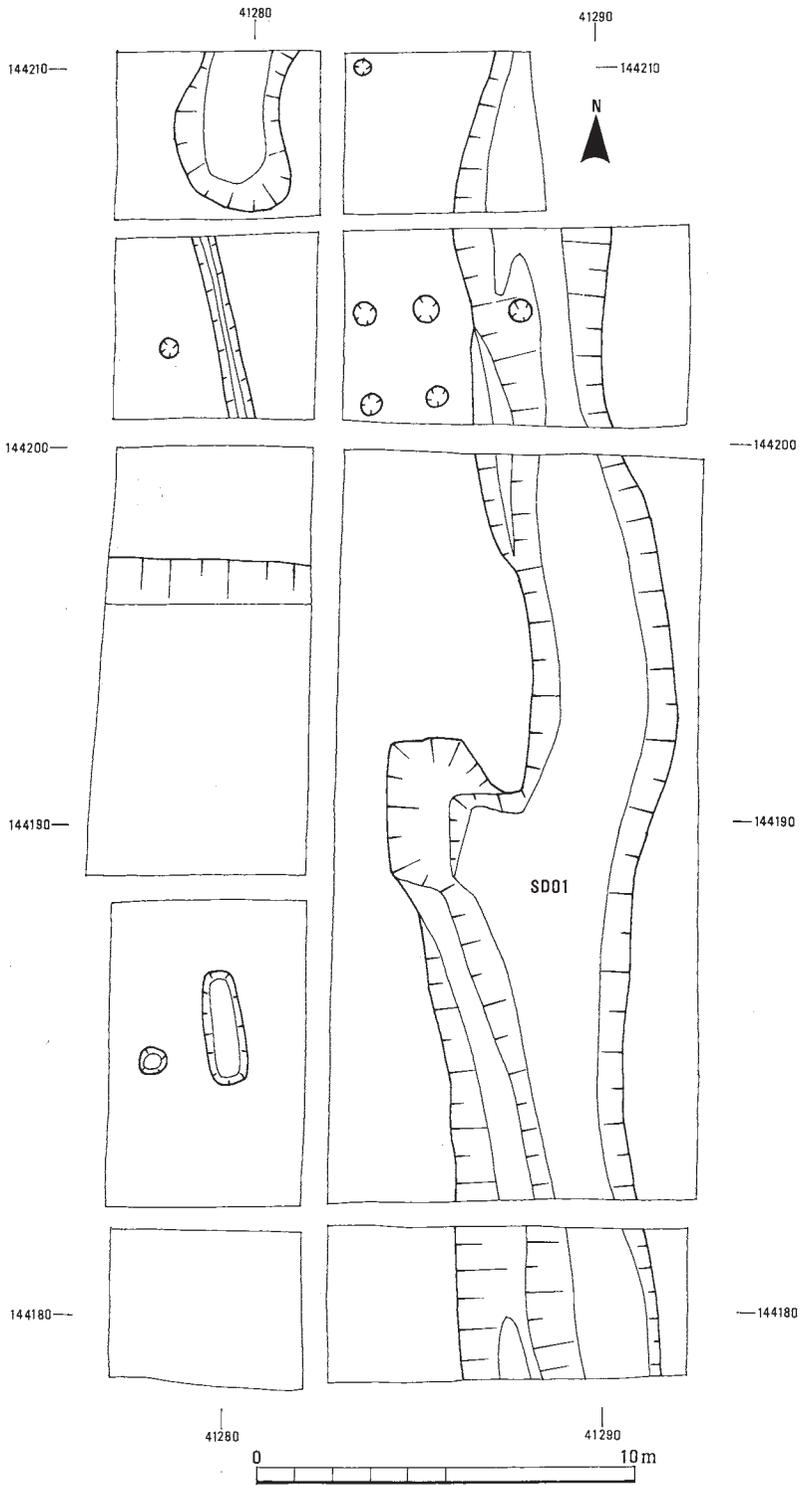
11月    溝の堆積土は多量の礫を含み、作業が難行する。東限大溝はかなり蛇行している。溝の内側では東大門跡、築地跡の痕跡は認められない。

12月    調査区最南端で築地基壇状高まりを検出するが、他に顕著な遺構は存在しない。写真撮影、遺構実測を行ない推定東大門地区の調査を終了。

1月    7日より、講堂跡東方地区において調査に着手。床土下約30cmで灰黄褐色粘質土（地山）となり、柱穴を多数検出したが、建物としてはまとまらない。他に中近世の南北溝を検出。

2月    1日、調査区中央で5個の礎石を検出したが、建物の規模を確認できず、調査地区を拡張する。25日より、奈文研上原真人氏の指導のもとで発掘調査を続行。

3月    礎石建物は、2間×3間の7尺等間の南北棟であることを確認。5日整備委員会を開く。9日より、やり方測量の木杭を設置し、実測にとりかかる。22日に実測完了。



第 2 図 推定東大門地区遺構図 (1 : 200)

## 第 4 章 遺 構

### 1 推定東大門地区 (第 2 図, P L. 1・2)

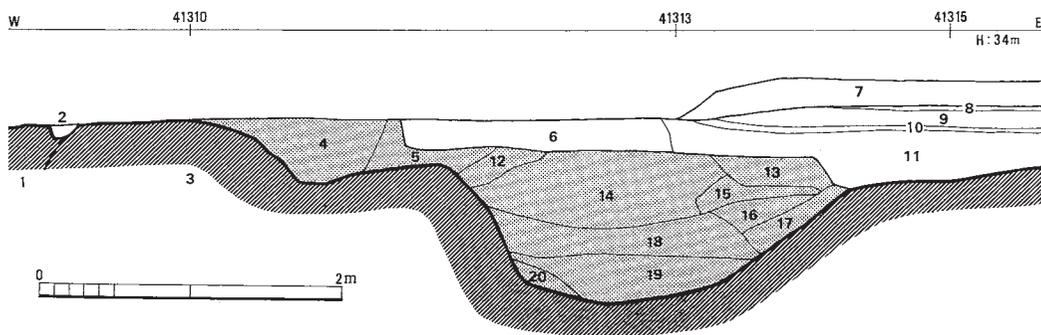
昭和58年に検出した東限大溝と築地跡との南延長上にあり、寺域を方 2 町と推定した場合、確認済の寺域北東隅から南 1 町の位置を推定東大門地区とした。調査地の基本層序は、(1)耕作土 (2)床土 (3)灰黄褐色粘質土 (地山) で、地山面で東限大溝を検出した。しかし、溝の内側では築地跡や東大門跡は検出できなかった。本調査地は、前年度に築地跡を検出した地点より 60cm 前後低く、水田造成に際して、これらの遺構は削平されたものと思われる。

**東限大溝SD01** (第 2・3 図, P L. 1・2) 国分寺寺域の東限を画す素掘りの溝。幅約 3 m、深さ約 80cm で、方位は北で、西へ約 2 度振れている。溝の堆積土から 11 世紀代と考えられる土器が出土しており、溝の下限年代が判る。前年度に確認した寺域北東隅における SD01 の溝底との比高差は約 - 2 m である。出土遺物には、コンテナボックス 200 箱分の土器・瓦がある。

### 2 講堂跡東方地区 (第 4 図, P L. 3・4・5)

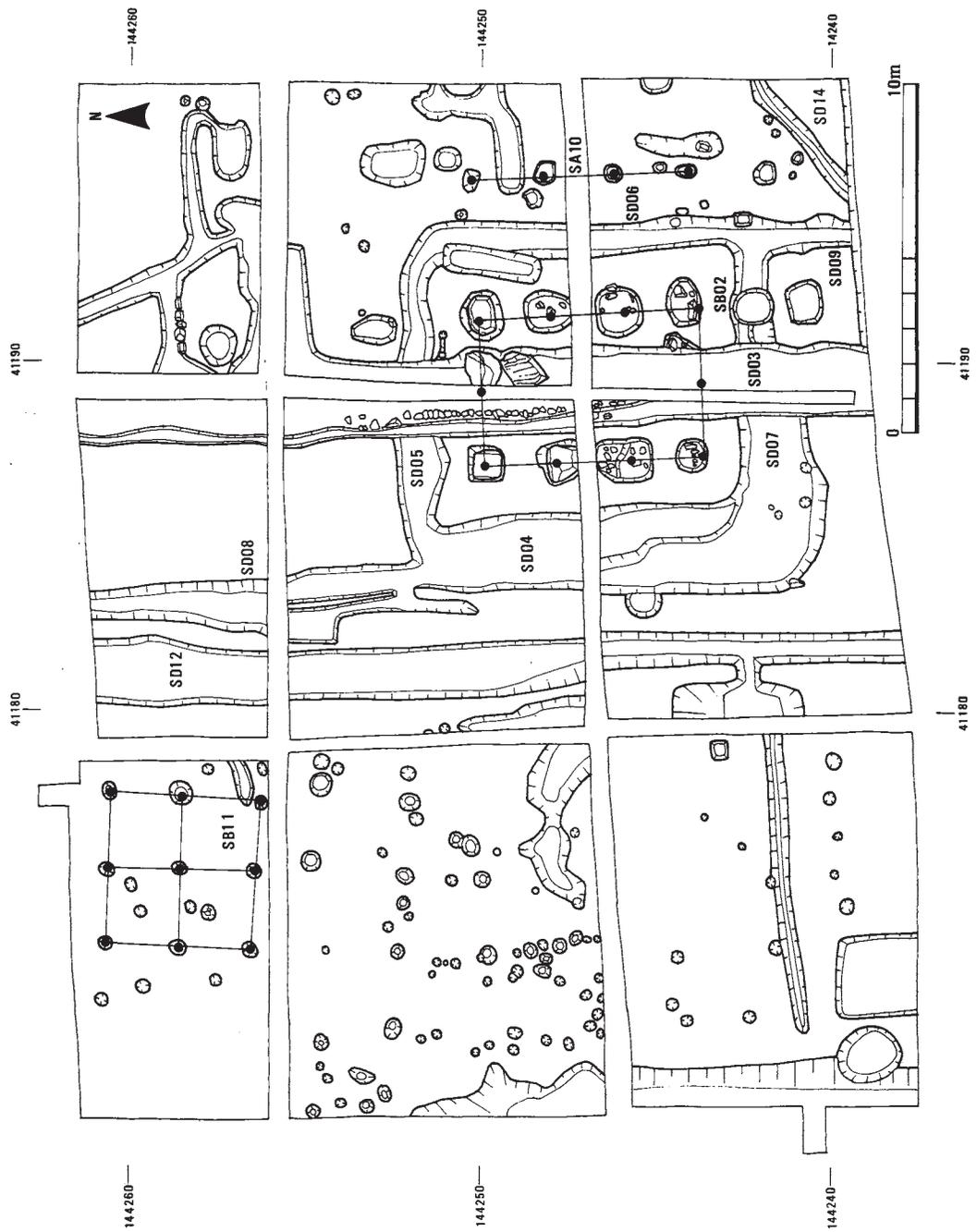
講堂跡東方地区では、奈良時代から近世までの遺構が重複している。基本層序は、上から (1)耕作土 (2)床土 (3)灰褐色粘質土 (4)暗茶褐色粘質土 (5)灰黄褐色粘質土 (地山) である。

**礎石建物SB02** (第 4・5 図, P L. 3・4) 礎石は 3 個が原位置で残り、根石を 5 か所で検出した。中央を近世の溝 SD03 が南北に走っているが、そこに落としこまれた礎石などを含めると、梁間 2 間、桁行 3 間、柱間 7 尺等間の南北棟に復原できる。礎石は、地山を削り出して造成した基壇状の高まり (東西 7 m、南北 9 m) の上に直接据えており、周囲に雨落ち溝 SD04・SD05・SD06・SD07 がめぐる。雨落ち溝は、西北隅において北から南流した



第 3 図 東限大溝 SD01 断面図 (1:50)

- |               |  |              |           |
|---------------|--|--------------|-----------|
| 1 灰黄褐色粘質土(地山) | 2 淡白色粘質土                                   | 3 淡黄色粘質土(地山) | 6 灰黄褐色粘質土 |
| 7 耕作土         | 8 床土                                       | 9 灰色粘質土      | 10 床土層    |
| 11 灰色粘質土      | 4,5,12,13,14,15,16,17,18,19,20 は礫を多量に含む粘質土 |              |           |



第4図 講堂跡東方地区遺構図 (1:200)

溝SD08を受け、SB02周囲をめぐって、東南隅でさらに南へのびる(SD09)。特に、SD04からは多量の瓦が出土した。出土した軒瓦は、奈良時代を主体とし、平安時代中期までの瓦を含む。造営年代および修理年代を示すものであろう。礎石建物の廃絶年代に関しては、遺物を検討中である。建物の位置は現本堂(旧講堂跡)中心から東北東にあり、金堂・講堂の中心を結ぶ推定伽藍中軸から東へ65m離れている。

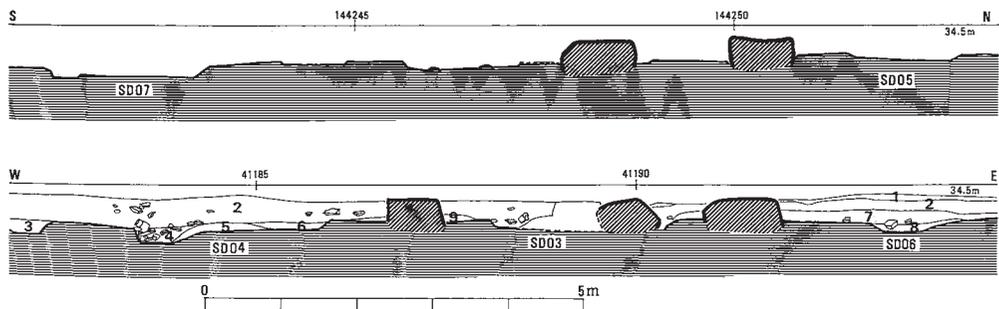
**南北塀SA10 (PL.3)** SB02の東で、礎石位置と対応する柱穴4個を検出した。直径50cmの掘形を持ち、SB02の東側柱筋から4m離れている。足場穴と考えるには離れすぎており、SB02に伴う何らかの閉塞施設であろう。

**掘立柱建物SB11 (PL.5)** 調査地区北西隅で検出した2間×2間の総柱の掘立柱建物。柱間は7尺等間、柱掘形は径約60cmで、2ヶ所で柱根が残っていた。建物の方角は、北で東に約1度振れており、礎石建物SB02の振れと異なる。

**SD12** SB11の東を南北方向に走る溝で、黄褐色砂質土から掘り込んでいる。幅80cm～2m、深さ20cmで、方位は北で西へ約1度振れている。埋土は暗褐色粘質土で、出土土器は中世から近世のものが主体をなす。

**SD14** 調査区南東隅で検出した斜行溝。幅40cm、深さ20cm、両岸に径1cmの抗を20cm間隔で打ちこんで護岸している。方位は北で西に約39度振れており、国分寺に関連する遺構とは方位を異にする。時期は不明であるが、農業用排水溝と思われる。

**その他の遺構** SD12の西側で多数の柱穴を検出した。柱根を残すものもあるが、建物にはならない。何条かの塀になるらしいが、機能的に説明し難い。また、礎石建物SB02の中央で石列を検出した。石列は、近世溝SD03を埋めたてた上に構築されており、調査地区北部で、東へほぼ直角に曲がる。近世の建物の土台をなすものであろうか。このほか、講堂跡東方地区の西端で瓦の堆積層を確認したが、調査区を拡張できず、その性格は解明できなかった。



第5図 礎石建物SB02付近土層図 (1:100)

- 1 灰色粘質土 2 灰褐色粘質土 3 暗褐色粘質土 4 暗灰色粘質土 5 灰茶色粘質土  
6 灰色粘質土 7 暗茶色粘質土 8 暗褐色粘質土 9 灰茶色粘質土

## 第5章 遺物

### 1 瓦（第6～10図，P.L.6～10）

2年次にわたる発掘調査の結果，軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・鳥衾瓦・埴などの瓦類が多量に出土している。特に，丸瓦・平瓦類の量は膨大で，洗浄もまだ終わっていない。ここでは，整理を一部終えた軒瓦に限って，出土瓦の紹介と検討成果の一部を述べる。

昭和59年度の発掘調査では，軒丸瓦13型式15種69点，軒平瓦13型式16種106点が出土した。今後，総括的な検討を行なうために，軒瓦に型式番号を設定する。型式番号は，軒丸瓦の場合はSKM，軒平瓦の場合はSKHの頭記号を付し，各々新型式と認定した順に若い番号を与える。番号につづく大文字のアルファベットは，同一型式内での異種（同文異範）を表示したものである。将来，同じ範での彫り直しが判明した場合には，小文字のアルファベットをこれにつづけて表示する。型式ごとの年度・地点別の出土点数は別表（次頁）に示す。

讃岐国分寺跡出土軒瓦に関しては，既に，安藤文良氏や大塚勝純・黒川隆弘の両氏等が集成・紹介している（安藤「讃岐古瓦図録」『文化財協会報』特別号8 香川県文化財保護協会1967年。大塚・黒川『讃岐国分寺の瓦と埴』1975年）。そのなかには，昭和58・59年度の発掘調査で，まだ出土していないものもある。それらの型式番号の設定は将来に委ね，発掘調査で出土したもののみを検討の対象とする。なお，発掘資料では瓦当部の残りの悪いSKM09・SKH01Aに関しては，西村正博氏・里野辰己氏保管品を図版・挿図に借用させていただいた。

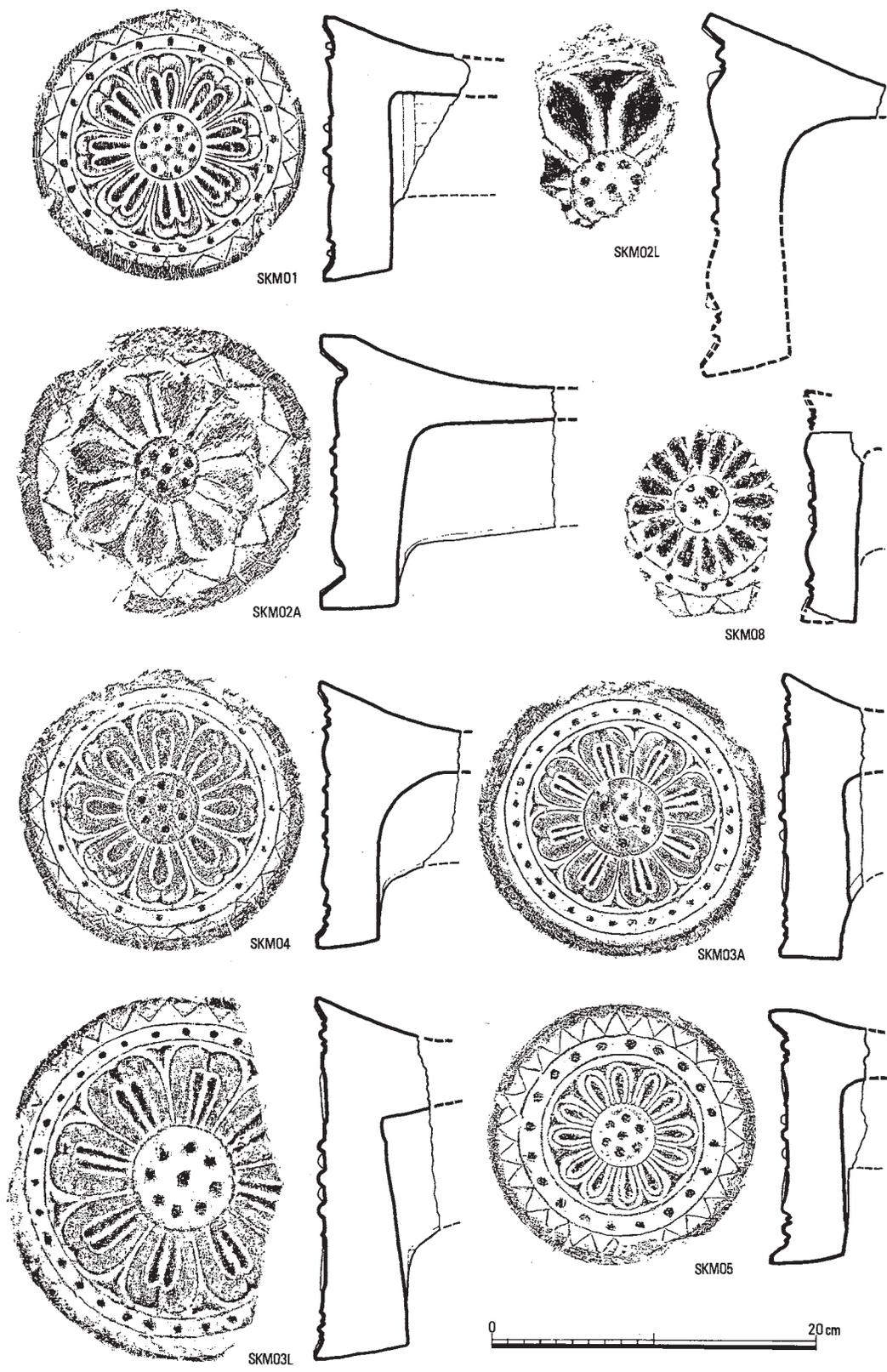
**軒丸瓦**（第6・7図 P.L.6～8）SKM01は複弁8葉蓮華文軒丸瓦。突出した中房に1+6の蓮子を置く。外区内縁には22個の珠文，外縁（斜縁）には線鋸歯文がめぐる。瓦範は瓦当外周まで及ぶ。青灰色を呈し，焼成堅緻。瓦当面径16.5cm。SKM02Aは単弁8葉蓮華文軒丸瓦。突出した中房に1+6の蓮子を置く。外区斜縁には大ぶりの線鋸歯文14個がめぐる。青灰色を呈し，焼成堅緻。瓦当面径17.2cm。SKM02Lは02Aの大型品。外区内縁に珠文がめぐる点異なる。瓦当面径（復原）23cm。SKM03Aは複弁8葉蓮華文軒丸瓦。弁はSKM01より平面的で，これを模倣したものと思われる。外区内縁の珠文は32個，外縁の線鋸歯文は省略されている。淡灰色のものと暗灰色のものとがあり，焼成は堅緻。瓦当面径17.0cm。SKM03Lは03Aの大型品。中房の蓮子が1+8で，外区外縁に線鋸歯文をめぐらせる点異なる。青灰色を呈し，焼成は堅緻。瓦当面径23.0cm。SKM04は単弁8葉蓮華文軒丸瓦。弁の子葉は1枚であるが，弁全体の形状はSKM03Aとよく似ている。瓦当面にはハナレ砂を施した痕跡がある。瓦当面径17.0cm。SKM05は複弁6葉蓮華文軒丸瓦。圏線で囲んだ中房に1+6の蓮子を置く。外区内縁には20個の珠文，外縁（斜縁）には26個の線鋸歯文がめぐる。暗青灰色を呈し，焼成堅緻。表面に自然釉が付着しているものや，いぶし焼風のものもある。筒部側面と瓦当裏面との境は，ケズリによって直角に整形している。瓦当面径15.0cm。SKM06は複弁8葉蓮華文軒丸瓦。やや突出し圏線

で囲んだ中房に、1 + 6の蓮子を置く。外区内縁には珠文、外縁には線鋸歯文がめぐる。暗灰色を呈し焼成堅緻。瓦当面径16.5cm。SKM07は複弁7葉蓮華文軒丸瓦。弁頂は内外区を分ける圏線と一体化している。圏線で囲んだ中房に1 + 5の蓮子を置く。外区内縁には20個の珠文、外縁には大ぶりの線鋸歯文11個がめぐる。外区外縁はゆるやかな斜縁をなし、内縁との間に段差がある。淡橙色を呈し、焼成は軟質。瓦当面径18.0cm。SKM08は単弁16葉蓮華文軒丸瓦。圏

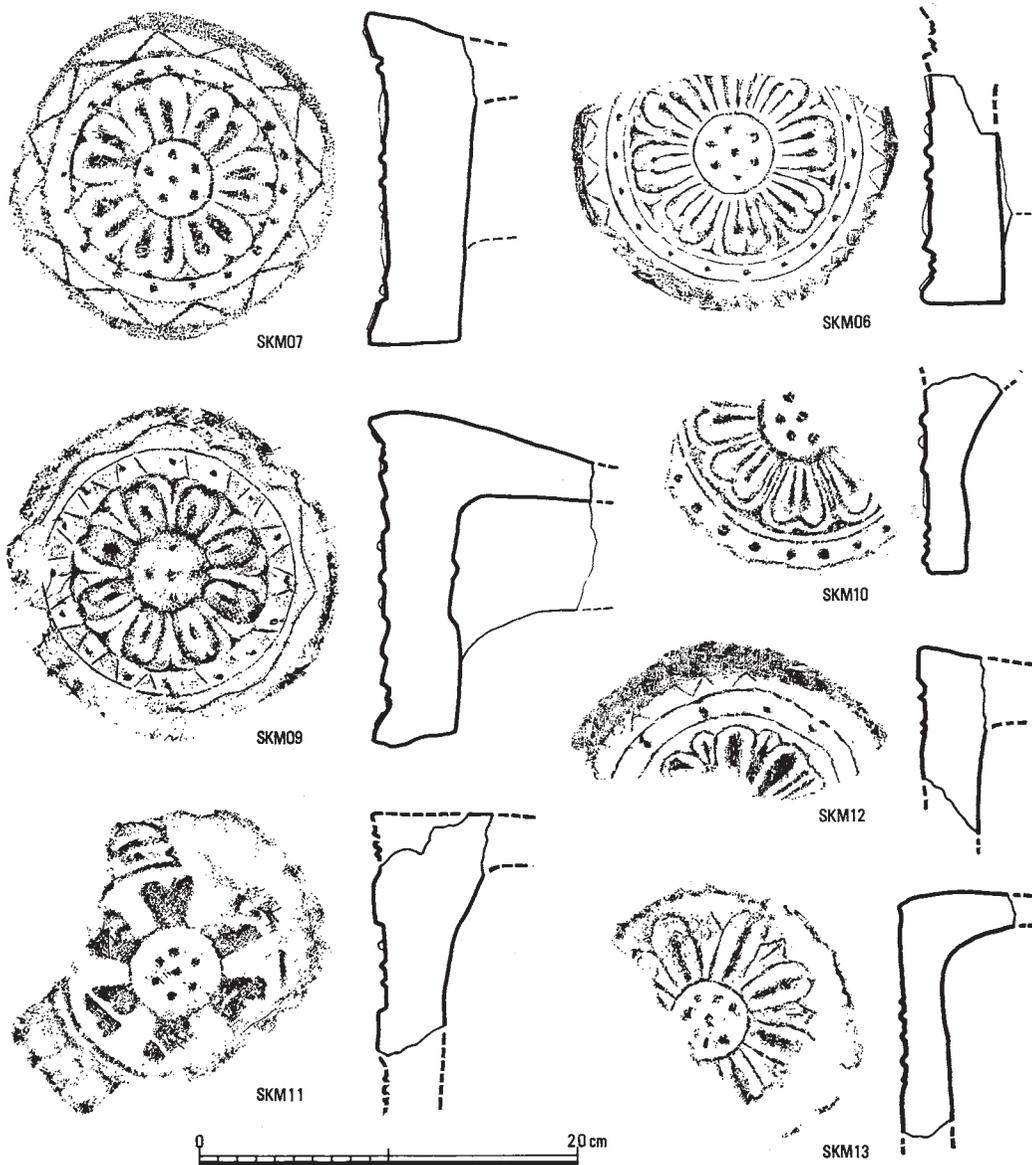
年度(昭和)		58	59		計	
型式	地点	東限築地周辺	東大門推定地	S B 0 2 周辺		
			S B 0 2 西方			
軒丸瓦	SKM01	0	0	7	1	8
	02A	0	4	7	0	11
	02L	0	2	0	0	2
	03A	1	3	5	2	11
	03L	1	1	1	0	3
	04	1	5	4	2	12
	05	1	1	2	1	5
	06	0	1	0	2	3
	07	0	3	5	2	10
	08	1	0	1	0	2
	09	0	1	1	0	2
	10	0	0	0	1	1
	11	0	0	0	1	1
	12	0	0	1	1	2
13	0	1	0	0	1	
	計	5	22	34	13	74
軒平瓦	SKH01A	4	3	4	4	15
	01B	2	5	15	1	23
	01C	10	9	8	1	28
	02	0	0	2	1	3
	03	4	3	3	8	18
	04	0	0	1	1	2
	05A	1	7	9	1	18
	05B	0	0	1	0	1
	06	0	0	1	1	2
	07	0	1	1	0	2
	08	0	2	0	0	2
	09	0	6	1	0	7
	10	0	2	0	0	2
	11	0	0	2	0	2
12	0	0	0	1	1	
13	0	0	0	1	1	
	計	21	38	48	20	127

年度・地点別軒瓦出土点数一覧表  
 (昭和59年度分に関しては集計途上で、将来、若干の増加が見込まれる)

線で囲んだ中房に1 + 5の蓮子を置く。外区内縁には珠文、外縁(斜縁)には線鋸歯文がめぐる。内縁の珠文は、内外区を分ける圏線と一体化している。青灰色を呈し、焼成堅緻。瓦当面径(復原)15cm。SKM09は単弁8葉蓮華文軒丸瓦。突出した中房に1 + 4の蓮子を置く。外区内縁は32区画に区分して、1区画おきに計16個の珠文を配す。外縁(斜縁)にはゆるやかな波状文がめぐる。暗灰色を呈し、焼成はやや軟質。瓦当面径18.0cm。SKM10は複弁蓮華文軒丸瓦。圏線で囲んだ中房に1 + 6の蓮子を置く。外区には珠文を配し、周縁を欠く。淡灰色を呈し、焼成は堅緻。瓦当面径(復原)16.7cm。SKM11は単弁6葉蓮華文軒丸瓦。弁頂に切込みがあり、複弁が変形したものかもしれない。1段くぼんだ中房に、1 + 6の蓮子を置く。同文例(大塚・黒川前掲書P.47)を参照すると、外区内縁には珠文、外縁には線鋸歯文がめぐる。淡茶色を呈し、焼成はやや軟質。瓦当面径18.8cm。SKM12は単弁8葉蓮華文軒丸瓦。間弁も主弁と同じ形態をとる。同文例(大塚・黒川前掲書P.49)を参照すると、突出した中房に1 + 4の蓮子を置く。外区内縁には珠文を粗に配し、外縁(斜縁)には線鋸歯文がめぐる。暗青色を呈し、焼成はやや軟質。瓦当面径(復原)19.2cm。SKM13は単弁8葉蓮華文軒丸瓦。間弁は外向きの矢印状に変形している。圏線で囲んだ中房に蓮子を置く。外区を欠き、周縁がわずかに高まる。淡橙色を呈し、焼成は軟質。瓦当面径16.0cm。

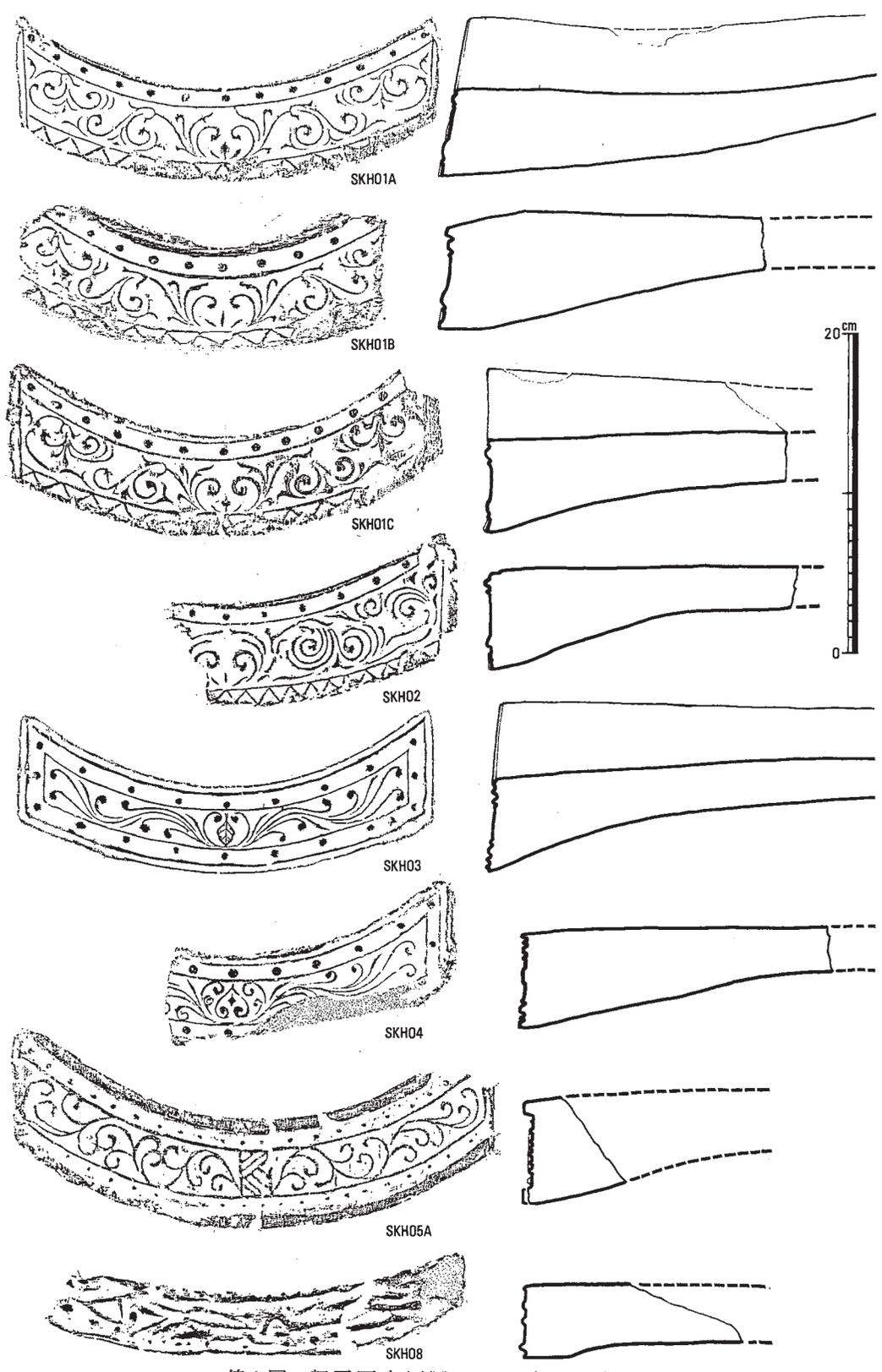


第6図 軒丸瓦実測図 1 (1:4)

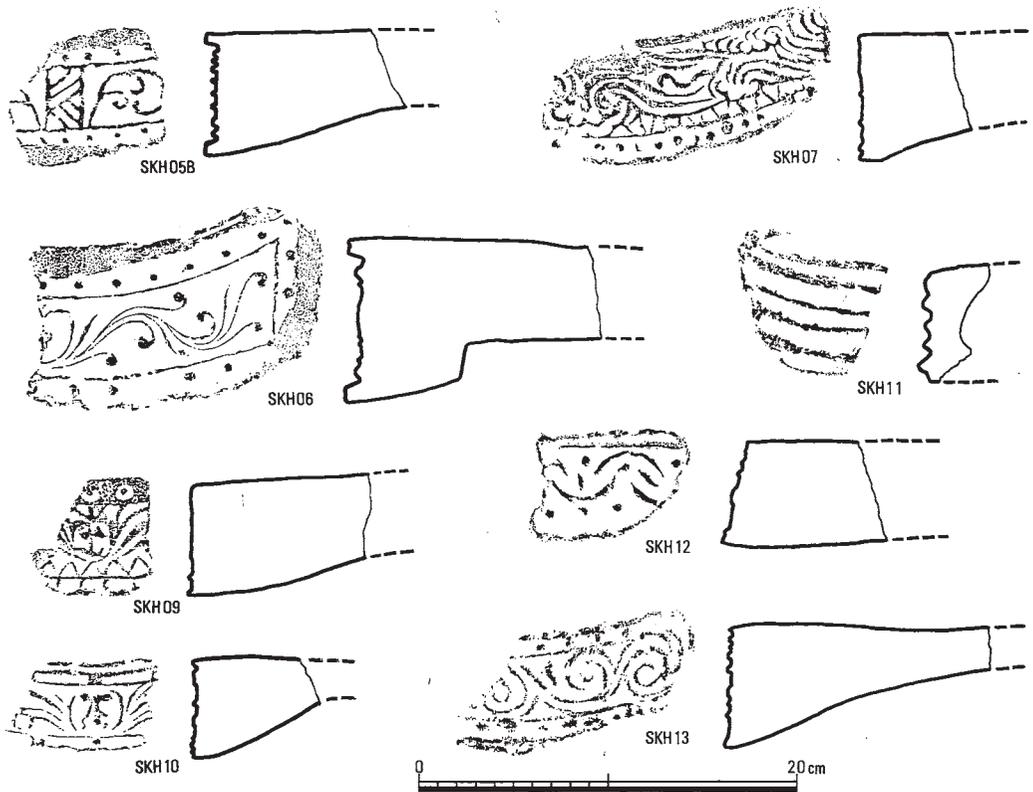


第7図 軒丸瓦実測図 2 (1:4)

軒平瓦 (第8・9図 PL. 8~10) SKH01は対葉花文を中心飾とし、背向する蕨手2葉を左右に各2転させ、空間を、楔形あるいはコマ状の小葉で埋めた均整唐草文軒平瓦。背向する蕨手2葉の分岐点には、鐘形の萼を置く。上外区には13個の珠文,下外区には線鋸齒文がめぐる。細部の違いによりA・B・Cの3種に細分できる。対葉花文を中心飾とする均整唐草文軒平瓦としては、大和東大寺式軒平瓦(平城宮6732系軒平瓦)が有名であるが、東大寺式軒平瓦は通例の平城宮式軒平瓦と同様、同じ方向に弯曲した蕨手4もしくは5葉を左右に3転しており、単位文様の観念に相違がある。また、下外区に鋸齒文を配する点も、顕著な違いである。顎の形態は、いずれも直線顎が主体であるが、Bには曲線顎のものがある。凹面は瓦当近くを



第8図 軒平瓦実測図 1 (1:4)



第9図 軒平瓦実測図 2 (1:4)

横ケズリで整形するほかは、糸切痕と布目圧痕とを残す。凸面はほとんどが縦ケズリで整形するが、Cには格子叩き目を残すものがある。青灰色を呈し、焼成堅緻のものが大部分を占める。上弦幅は26.0cm、瓦当の厚さA;5.5cm、B・C;6.0cm。SKH02は01の文様系譜下にある均整唐草文軒平瓦。平瓦広端部凸面に別粘土を貼りつけて瓦当部を成形している。淡赤色を呈し、焼成は軟質。上弦幅(復原)27.0cm、瓦当の厚さ7.5cm。SKH03はC字上向型内に木葉状文を垂下し、長くのびた蕨手3葉を左右に各3転させた均整唐草文軒平瓦。上外区・下外区に各9個、左右両脇区に各1個の珠文を配す。凹面・凸面ともに丁寧なケズリ・ナデによって調整する。青灰色を呈し、焼成壁緻。自然釉が付着するものや、いぶし焼風のものもある。上弦幅26.0cm、瓦当の厚さ5.8cm。SKH04は中心飾は異なるが、左右に反転する蕨手の形状は03に似る。青灰色を呈し、焼成堅緻。上弦幅(復原)27.0cm、瓦当の厚さは6.6cm。SKH05は長方形内に納めた綾杉文を中心飾とし、蕨手3葉を左右に各4転させた均整唐草文軒平瓦。上下外区には珠文がめぐる。細部の違いで、A・Bの2種に細分できる。淡橙色を呈し、焼成は軟質。A;上弦幅28.5cm、瓦当の厚さ6.6cm、B;瓦当の厚さ6.8cm。SKH06は03の大型品。青灰色を呈し、焼成堅緻。上弦幅28.0cm、瓦当の厚さ9.0cm。SKH07以下は小片で全体の文様構成が不明、もしくはは文様として著しく崩れており、文様構成の理解が困難なもの。SKH07は淡灰色を呈し、焼成壁緻。凸面に繩叩き目を残す。厚さ7.0cm。SKH08は淡茶色を呈し、焼成は軟質、上弦幅26cm、瓦

当の厚さ4.0cm。SKH09は暗灰色を呈し、焼成は軟質。瓦当の厚さ5.7cm。SKH10は淡橙色を呈し、焼成は軟質。瓦当の厚さ5.3cm。SKH11は淡茶色を呈し、焼成は軟質。瓦当の厚さ6.2cm。SKH12は暗灰色を呈し、焼成は軟質。瓦当の厚さ5.8cm。SKH13は淡白色を呈し、焼成は軟質。瓦当の厚さ6.5cm。

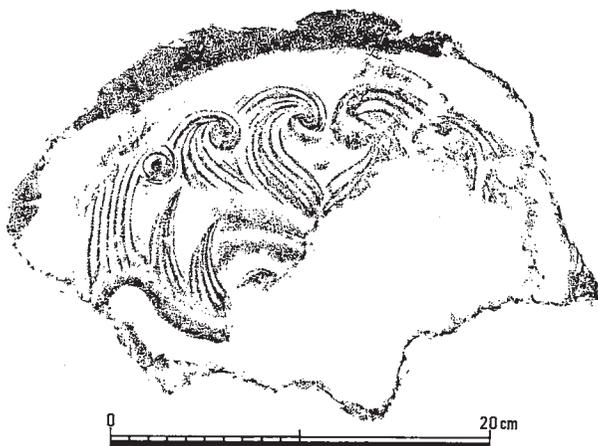
**軒瓦の組合せと年代** 現状では、讃岐国分寺における軒瓦の組合せと年代に関して、十分な議論ができるほどの資料は集まっていない。ここでは、比較的可能性の高いものに限って、若干の見通しを述べておきたい。なお、ここで述べる出土総数はとは、軒丸瓦・軒平瓦各々に関する2か年の出土数の合計である。

軒平瓦で絶対多数を占めているのはKSH01で、出土総数の52%を占める。これに対し、軒丸瓦では絶対多数を占める型式が存在しない。おそらく、KSH01には複数の型式の軒丸瓦が組合わさるのであろう。KSH01が讃岐国分寺創建時の軒平瓦であることは確実である。瓦当文様や製作技術から、創建時に遡る可能性の強い軒丸瓦として、SKM01・SKM02A・SKM03A・SKM04の4型式が挙げられる。SKM02L・SKM03Lも、当然、8世紀後半代のものであろうが、大型軒丸瓦には普通の軒丸瓦とは別途の機能が想定されるので、ここでは除外する。出土総数に対する各々の軒丸瓦が占める割合は、SKM01は11%、SKM02Aは15%、SKM03Aは15%、SKM04は16%、計57%で、KSH01の占める割合に近似する。おそらく、この4型式の軒丸瓦をSKH01軒平瓦と組合せるのが妥当であろう。

KSH01は細部の違いでA・B・Cの3種に細分できる。その差は顕著ではないが、A・B・Cの順で文様がやや崩れており、若干の時期差が想定される。軒丸瓦ではSKM01が最も整っており、SKM03A・SKM04はやや後出的である。出土総数に対してSKH01Aが占める割合は12%、SKM01が占める割合は11%で、各々の割合は決して大きくない。それは、昭和58・59年度の発掘調査地が、主として寺域内でも周辺部に当たるため、伽藍中枢部における主要な組合せが、

SKM01—SKH01Aである可能性は充分考えられる。なお、SKH01Aの瓦範を彫り直し、上外区珠文帯を厩縁にした軒平瓦が尼寺跡で出土した

このほか、平安時代中頃（10世紀頃）の軒瓦の組合せとして、SKM07—SKH05が考えられる。両者は創建時のものを除外した残りの軒瓦のなかで、量的に抜きんでおり、胎土・焼成の類似性からもその組合せが首肯できる。



第10図 鬼瓦拓影 (1:4)

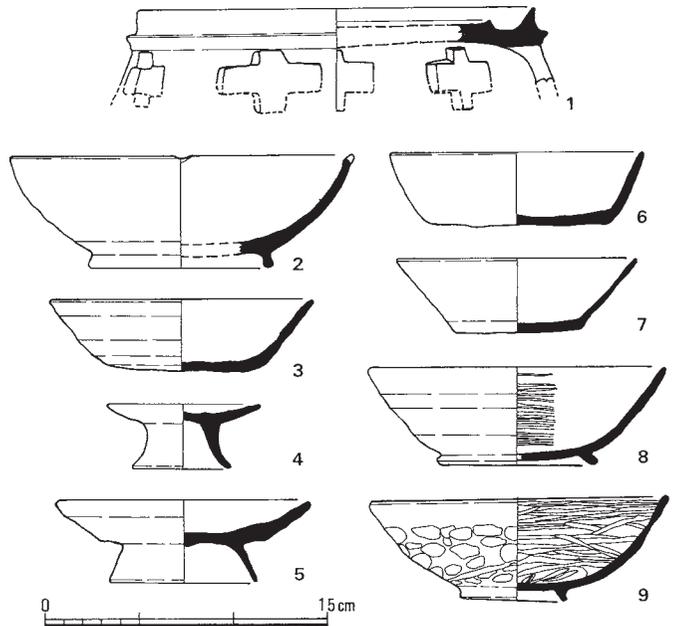
## 2 土器（第11図）

推定東大門地区の東限大溝SD01からは、奈良時代～平安時代後期の土器が出土し、講堂跡東方地区において礎石建物SB02の雨落ち溝から奈良～平安時代前期の土器、南北溝SD12から中世～近世の土器、南北溝SD08からは近世の土器が出土している。出土土器については整理途中であるため、ここでは東限大溝SD01、礎石建物SB02西落溝SD04の出土土器の一部を略述する。

**SD01出土土器**（第11図3・4・5・8・9） 3は土師杯。口径8.2cm、器高3.8cm。内外面ともに淡橙色を呈し、焼成はやや軟質である。内面・外面体部はヨコナデで調整し、外面底部はヘラ切り離し痕をとどめる。4・5は土師質高台付皿。色調は内外面ともに乳白色で、焼成はやや軟質である。4は口径8.2cm、器高3.4cm、底部径は5.2cm、5は口径13.6cm、器高5.4cm、底部径7.8cmである。8は黒色土器椀で、復原口径16.0cm、器高8.2cm、底部径8.4cm。色調は外面淡橙色、内面は暗褐色を呈し、焼成はやや軟質である。内面はヘラ磨きで調整している。9は和泉産の瓦器椀と似ており、復原口径15.9cm、器高5.4cm、底部径は5.8cmである。色調は内外面ともに銀光りのする暗灰色で、いぶし焼風である。内面にはヘラ磨きを密に施し、外面はヘラケズリで調整する。これらの土器の年代は11世紀末～12世紀初頭に位置づけられよう。

**SD04出土土器**（第11図6・7） 6・7ともに須恵器杯身。6は口径13.4cm、器高3.8cmである。色調は灰色を呈し焼成は壁緻である。内面、外面体部はヨコナデ調整、外面底部はヘラ切り離し痕を残す。7は口径12.6cm、器高3.8cmである。色調は淡白色であり、焼成はやや堅緻であり、内外面ともヨコナデ調整を施している。

**その他の土器**（1・2） 1・2は礎石建物SB02周辺の暗茶褐色粘質土（包含層）から出土した。1は須恵器円面硯で復原口径21.2cmで、色調は灰色を呈し、内面はヨコナデ調整を施している。2は輪花の緑釉椀で、口径18.2cm、器高6.0cmで内外面ともにヨコナデの上にヘラナデ調整を施している。



第11図 土器実測図（1：4）

## 第6章 ま と め

昭和58年度の発掘調査で、寺域北東隅を確認した。現国分寺仁王門の南の東西道路を、旧寺域の南限と仮定した場合、寺域は南北233mとなる(現在の特別史跡指定範囲)。本年度調査した推定東大門地区は、寺域の南北を2町と仮定した場合、丁度その2等分点にあたる。調査の結果、前年度に確認した東限大溝SD01の南延長を検出したが、大溝の内側では、築地や東大門に関連する遺構を確認できなかった。地形的にみると、本調査地は水田造成に際して削平を受けていることが推定できるので、東大門がここに存在しなかったかどうか、現段階では判断できない。今後は寺域南限を確認することによって、東大門推定地自体の妥当性も再検討する必要がある。

講堂跡東方地区については、奈良時代の建物跡としては礎石建物1棟を確認した。金堂跡・東端築地跡などと方位はほぼ同じで北で西へ約2度振れている。雨落ち溝から出土した軒瓦は、奈良時代のものが主体的で、平安時代中期までの軒瓦を一部含む。土器は整理途上ではあるが、奈良～平安時代前期のものが主体的である。礎石心々距離は7尺等間、2間×3間の南北棟であり、講堂跡の東北東に位置することから、鐘楼跡の可能性が考えられる。しかし、この礎石建物を鐘楼跡とすると、新たな問題が生ずる。讃岐国分寺は金堂・講堂などの主要堂宇を寺域の西半分に配置していると考えられていた。すなわち、寺域を東西2町と仮定した場合、金堂と講堂の中心点を結ぶ伽藍中軸線が、寺域西端から $\frac{1}{2}$ 町の位置にあると想定されているわけである。しかし、今年度確認した礎石建物は、伽藍中軸から東へ65m離れており、これを伽藍中軸線に対して西へ折りかえすと、従来の推定寺域西限から外にはみだしてしまう。したがって、ここでは伽藍中軸に対して、対称的な位置に鐘楼と経蔵とを配置するという通常の伽藍配置を想定することが困難となる。その解決策としては

- ①今回検出した礎石建物SB02を鐘楼(あるいは経蔵)とは別種の建物と考える。
  - ②伽藍中軸に対して、鐘楼・経蔵が対称的な位置になく、経蔵は推定寺域内の西端で伽藍中軸にもっと近い位置にあると考える。
  - ③寺域西限が、現在の推定地よりももっと西にあると考える。
- という3つの案が想定できる。

①案は2間×3間、7尺等間の礎石建物に鐘楼・経蔵以外の性格を想定しにくいことから一応除外できる。したがって、②③案の妥当性が高いと考えられるが、そのいずれが正しいかは、来年度以降の寺域西限の確認調査および、中心伽藍西方地区の発掘調査を待って決定したい。

圖

版



(1) 東 限 大 溝 (北から)



(2) 東 限 大 溝 (南から)



(3) 東限大溝 (西から)



(4) 東限大溝の堆積状況



(5) SB02 (北から)



(6) SB02 (東から)



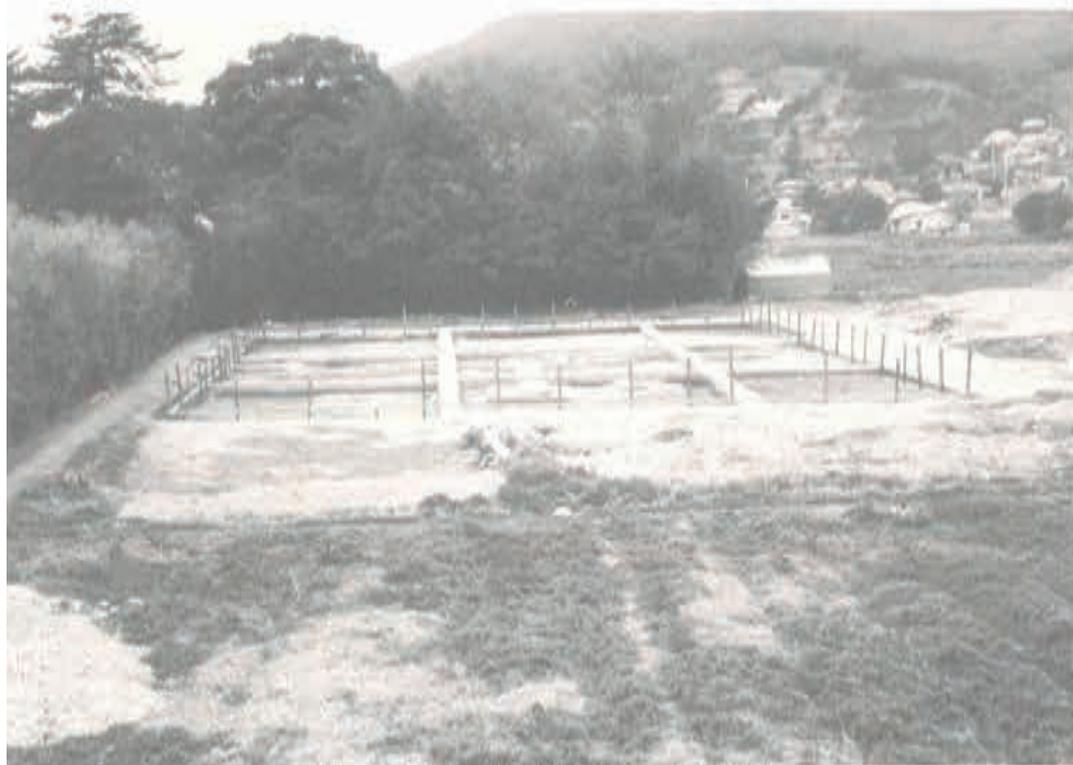
(7) SB02 (北から)



(8) SB02 (南から)



(9) S B I I (北から)



(10) 講堂跡東方調査区全景 (東から)



SKM13



SKM01



SKM06



SKM03



SKM12



SKM02A



SKM05



SKM09



SKM04



SKM07



SKM03L



SKM10



SKM02L



SKH01A



SKM08



SKH01B



SKH01C



SKM11



SKH03



SKH05A



SKH05B



SKH08



SKH10



SKH04



SKH07



SKH06



SKH11



SKH02



SKH09



SKH13



SKH12



鬼瓦



第12図 発掘調査位置図

1:1500

東

西

100 200 300

特別史跡 讃岐国分寺跡  
昭和59年度発掘調査概報

1985. 3. 31

編集 国分寺町教育委員会  
発行

印刷 共 栄 印 刷